シリーズ　研究室からフィールドへ　第25回

実践と研究の両方から考える

有松・犬山・中川運河プロジェクト

愛知県名古屋市・犬山市

柳沢究研究室
名城大学 理工学部 建築学科

歴史的建物を大学が活用

東海道沿いの歴史的なまち並みが残る名古屋市緑区有松。名古屋市の南東部に位置するこの町は絞り染めの「有松絞り」で発展し、大規模な主屋や土蔵を有する絞商の屋敷構えと町家が建ち並ぶ。街道に面して門や塀が連続するため、塀越しに庭木などを見越す景観が広がっている。有松のまち並みは今年、名古屋市内初となる国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

そのまち並みの一角に、周囲の伝統的な板塀と調和する現代的なデザインの塀がある。古色に塗装した木板を用い、金属板一枚葺の屋根と三角の垂木板によるシンプルな構造だが、塀の足元には大きさやかたちの異なる石を組み合わせた基礎の石積みが独特の表情をつくり出している。

この塀を建てたのは、建築家で名城大学理工学部建築学科准教授の柳沢究先生と研究室の学生たちだ。まち並みにそぐわない既存の古い鉄骨ガレージを撤去し、大工の中村武司さんの指導のもと学生が施工した。穴掘り・石積み・木材加工・建て方・古色塗装にいたるまで、全面的に学生が作業を行い、2015年3月に完成した。

これはもともと塀をつくることが目的で始まったプロジェクトではない。かつて絞り問屋を営んでいた服部良也家住宅と県指定文化財である土蔵の所有者から、「大学に建物を教育研究目的で活用してほしい」と2013年に相談がもちかけられたのがきっかけだった。歴史的な建物を維持管理するには莫大な費用がかかる。それを住民が個人で負担するのは難しいのが実情だ。住民も高齢化し、空き家となってしまう例も少なくない。全国に広がるこうした問題に対し、関西では町家を大学が教育目的に活用する取り組みも増えている。

イベント重ね地域と交流

柳沢先生は「まだ解決策が見つかっていない社会問題にリアルタイムで取り組むことは学生にとって得がたい機会」と捉え、研究室の活動として有松に関わることにした。その取り組みの一環として、所有者の要望に応えるかたちで有松のまち並みに調和した塀を新設した。

その後も継続的に地域と連携して活動を行っている。2015年10月には、無印良品・名古屋名鉄百貨店にて有松の魅力を発信するワークショップイベントを企画・開催した。さらに、服部良也邸で有松絞りのワークショップや他研究室を交えたミーティング、一般公開見学会、土蔵での展示など、様々なイベントを開催してきた。2016年6月には有松絞りまつりに参加し、これまでの活動をまとめた展示を行った。「少しずつ実績をつくり、将来的には大学が建物を借りて、ゼミや講義の会場として使用したり、大学が地域社会に対して市民講座を開くなど、社会との接点になるような場をつくっていければと考えている」（柳沢先生）。

学生が定期的に通うようになったため、地域との交流も深まりつつある。名城大学学部4回生の吉川千由希さんは「このプロジェクトを経験して、地域の人との付き合いを積み重ねて、礼儀正しく人と接するというような人として普通のことを普通にで

服部良也家住宅（写真中央）の敷地の一角（写真右側）に塀を新設した。写真左は県指定文化財の土蔵

既存ガレージの解体＊

塀建設前の状況＊

石組み。かつての門柱の礎石や間知石を活用した＊

基礎工事＊

建て方＊

古色仕上げ＊

有松の景観と調和する新しい塀を設置した。高さや屋根などを既存の塀（写真左）に揃えている。板塀は足元が痛みやすいため、敷地内に転がっていた昔の門柱の礎石や間知石をパズルのように組み合わせて石組みを設置した

●有松の塀
設計期間：2014年12月～2015年2月、工事期間：2015年3月
設計：名城大学柳沢研究室（柳沢究・山本将太・及部友誉・加藤大誠・諏訪匠・長屋美咲・松田彩花）
施工：工作舎中村建築（中村武司・佐藤俊伸）＋名城大学柳沢研究室（山本将太・岡田一輝・市村千尋・大野将弥・及部友誉・加藤大誠・川端一輝・諏訪匠・長屋美咲・松田彩花・渡辺愛理・今江将吾・遠藤結夏・保浦開・川嶌梓・児玉春香・河合栄拓・鈴木友之・鈴木結貴・高間智子・竹内久美子・吉川千由希）
企画・監修：究建築研究室

きなければうまくいかないということをすごく感じた。今後も研究室として地域と長く付き合っていくと思うので、そのことを後輩に引き継ぎたい」と話す。服部良也家住宅に住む服部安輝枝さんは、「学生はとても真剣で、毎年大きくなっていく。外見は大人でも、中身はまだ少し大人になりきれていない部分もあって、強気なところも面白い。その成長過程がすごく興味深い」と学生との交流を楽しんでいる。

旧銭湯を有松絞りの工房に

有松での地道な活動が少しずつ実を結び、地元で絞り加工会社を営むスズサンから旧銭湯を有松絞りの工房兼宿泊施設に改修するプロジェクトの相談が研究室にもちかけられた。スズサンの村瀬裕さんは「みんな、ものづくりをしたくても場所がなくて困っている」と話す。スズサンは海外を中心にブランドを展開しており、海外からのインターンも受け入れている。インターン生がアトリエとして活用したり、観光客に対してワークショップを開いたりする場所を求めていた。

そこで、2014年に廃業した築約40年の銭湯・東湯を改修し、1階を工房、2階をインターン生の宿泊スペースなどにリノベーションする計画がもち上がった。染めの工程は水を使うため、銭湯の浴場は染めの工房として適している。また、銭湯の煙突は有松駅からもすぐ見えるのでランドマークにもなる。早速、研究室の学生が現地で建物の実測調査を行って図面化し、提案をまとめて模型を製作した。

有松のまち並み

2016年2月に行われた土蔵での展示風景＊

2015年10月に開催された無印良品名古屋名鉄百貨店でのワークショップイベント＊

2016年6月に開催された有松絞りまつりでこれまでの研究室の活動を展示した＊

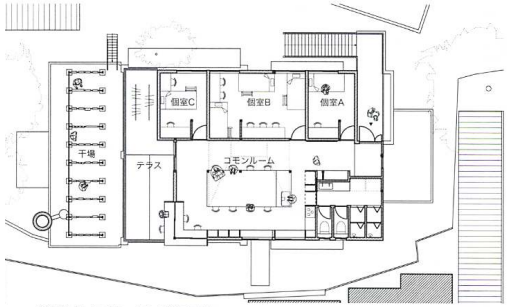
2016年4月に服部良也邸で行われたミーティング風景＊

ただし、この計画はまだ構想段階。資金の目途も立っていない。「イメージを共有するために研究室で提案をつくった。資金をどう集めるかも含めて、これから町の人と話をしながら、実現に向けて動いていく」（柳沢先生）。学生たちの提案に対して、スズサンの村瀬さんは「模型があるとイメージがふくらむ。すばらしいアイデアで、我々が考える以上に理想的。ただ、その理想をどれだけ実現できるかが課題だ。すでに銭湯を使って藍染めのワークショップなどを行っているが、徐々に使用頻度を上げて、個人ではなく、有松絞りの産地全体でこの場を活用できる場にしたい。時間をかけて、その意識をどんどん高めたい」と話す。

「東湯の改修では提案プランをつくるところまでいったが、塀をつくった後は、イベントをしたり、調査をしたり、ワークショップを行ったりと、ものをつくるまでいたらない作業が多く、建築学科の学生にとっては少し物足りないところもあったかもしれない」と柳沢先生は話す。しかし、徐々に地域の人との関係をつくり、有松について自分たちで積極的に関わろうとしてきたからこそ東湯でプランを提案する機会が生まれた。柳沢先生は今回の教育効果について次のように説明する。「学生は実社会で仕事が生まれる過程を体験できた。今回の東湯の案をつくった時点で、建築学科の学生のトレーニングとしては十分意義がある。大学の教育は、答えがあらかじめ分かっていて、うまく答えが出るような課題を与えてしまう。しかし、このプロジェクトはうまく着地できるかどうかも分からない。それを経験できるのは学生にとっても良いことだと思う」。

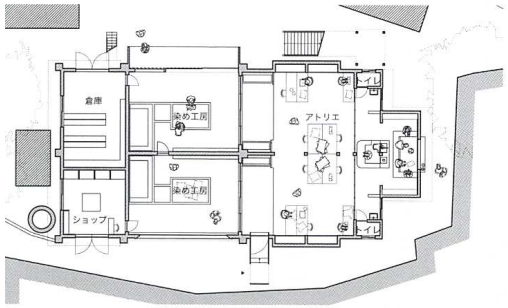
東湯の内部

2014年に廃業した銭湯・東湯



東湯改修プロジェクト 2階平面図

東湯の実測調査風景＊



東湯改修プロジェクト 1階平面図　1/300

東湯改修プロジェクト模型1階部分。銭湯の浴場を染めの工房として活用する

「右手で設計、左手で論文」

柳沢研究室では研究と実践の両面からのアプローチを大事にしている。柳沢先生がそう考えるようになったのは京都大学の学生時代の経験が大きい。柳沢先生は大学4年のとき、アジアのフィールドワークをするために、アジア都市建築研究を行っていた布野修司研究室を選んだ。布野先生の口癖が「右手で設計、左手で論文」という言葉だった。「研究と設計を両方やっていくことが大事だ」ということを学生の時に言われて、今でも意識している」と柳沢先生。それは現在の柳沢研究室の基本方針にも表われている。

布野研では、宗教都市研究として、円環状の構造をもった宗教都市である北インドのヴァーラーナシーや南インドの宗教都市マドゥライを研究した。布野研は興味をもったらとにかく現地に行って、住宅の実測調査も突撃でやってしまう。そのゲリラ的なフィールドワークの考え方は現在の研究室の活動にもつながっている。現在、柳沢研究室ではヴァーラーナシーの融合寺院（既存の寺院が隣接する建物の増築などにより吸収され、他用途と融合する現象）をテーマに研究を行っており、最近は内部空間の実測や変化した経緯を図面化するなどの作業を行っている。

また、柳沢先生が地域に入り込み、職人と共同で作業するようになったのは、京大の博士課程時代の活動が原点となっている。同じく布野研究室出身の建築家・森田一弥氏と現・京大地域研究情報センター特任助教の山田協太氏との3人で神楽岡工作公司を結成し、京都で町家を改修するプロジェクトを手がけていた。そこで左官職人や庭師、大工などの職人とのつながりが生まれた。さらに、活動場所だった町家で様々なイベントを開催するようになった。「京都でやっていたように、都市に密着して、まちの魅力を引き出していく活動をしたいと思っていた」と柳沢先生は話す。

インド・ヴァーラーナシーの寺院と住宅の融合現象＊

木匠塾が自らつくるきっかけに

柳沢先生のもう一つの原点は学生時代に参加した木匠塾だ。「木工を教えてもらうので、参加後は簡単な施工なら自分でできるようになる。学生に工具を使わせて自分たちで施工するようになったきっかけとなった」と柳沢先生は話す。木匠塾は1991年に岐阜県高根村で始まった林産地で木の建築を学ぶサマースクールだ。岐阜県加子母村で開かれている加子母木匠塾は2016年で22年目を迎え、名城大学は2014年から参加している。近年は国の事業で域学連携を行っており、山に囲まれた自然の豊かな村で、参加大学がそれぞれ製作物をつくるとともに、地域としても、学生の活気を借りながら、高齢化した村を盛り上げる。

木匠塾の作業風景＊

2016年8月11日から28日にかけて、8大学（東洋大学、京都大学、京都工芸繊維大学、金沢工業大学、立命館、滋賀県立大学、京都造形大学、名城大学）が集まり、今年は総勢291名が大学毎に製作物をつくった。名城大学からは4年生を中心に学部1年から大学院生まで43名が参加し、薪割り器小屋を製作した。各大学に地元工務店の担当者が付くが、加工組み立てなどの作業はすべて学生が行う。「今回は基礎から屋根まですべて自分たちで関わることができ、すごく良い経験になった。やる気のある後輩や他大学の同学年に刺激を受け、これから卒業研究や卒業設計を頑張りたいという気持ちになった」と幹事で4回生の今江将吾さんは話す。

設計を担当した4回生の鈴木友之さんは「今回は既存建物に増設する計画だったので、実測に入ってから設計と違うところが出てきたりして、昨年とは違った難しさもあったが、工期通りに進めることができた」と感想を語った。会期中に開催された技能オリンピックでは棟梁を担当した4回生の河合栄拓さんが優勝。「研究室の活動でこうした作業をする機会が多く、大工さんに直接指導をしてもらった。その経験が活きた」と河合さんは研究室で学んだことを実感する。

防災ビルを癒やしの空間に

現在、柳沢研究室では、前述の有松の活動の他にも複数のエリアで活動を行っている。そのひとつが愛知県犬山市の「防災共同ビル（下本町防災ビル）」だ。国宝・犬山城の城下町南部地区にあり、現在は空き室が多く老朽化した防災ビルを対象に、都市情報学部海道清信研と共同で2014年から調査を行っている。防災ビルは古い まち並みが残る城下町の南端に建つ、昭和テイスト漂うRC造のビルで、多くの人で賑わう観光地に隣接。南北に120mの長さをもつ防火帯建築が通りを挟んで両側に向かい合う。

建物が寂れているため地元の人からは観光地の「お荷物」として見られているが、城下町の町家の形式を受け継ぐ長屋形式の地割りが行われており、この建物を「昭和の町家」としてまちづくりの貴重な資源であると捉えることもできる。柳沢研究室では、その価値を地域の人にも理解してもらい、賑わいのある場所とうまくつなげて、活用の実現に向けた取り組みを行っている。

学生が現地で実測を行い、防災ビルの住人に聞き取り調査を行った。その調査をもとにビルの再生活用の提案を行った。人を呼び込むため、あえて余白の空間をつくり出し、緑化や屋上活用をすることで、地域の人にとってオアシスのような空間を創出する。その提案には、犬山全体にとっての癒やしの場所となる「まちのたまり」をつくるという意味で「下本町タマリウム」と名付けた。そして、犬山の人たちに見てもらうために、犬山市役所の1階玄関ホールや防災ビルの一角の空き部屋を借りて展示を行った。その提案を学生設計コンペに応募し、入賞を果たした。

防災建築街区造成事業によってつくられた防災建築街区の老朽化は全国的な問題だ。現在の都市再開発法の前身である防災建築街区造成法が1961年に施行され、RC造の長屋式店舗併用住宅が全国に多数建設された。柳沢研究室では、そうした調査研究も同時に進めており、今回の提案は老朽化した全国の防災建築街区の問題を考えることにもつながっている。今後は、通り

愛知県犬山市の防災共同ビル（下本町防災ビル）＊

防災ビルの空き部屋で行った展示風景＊

下本町タマリウムの提案内容

下本町タマリウムの提案について説明する学生たち

●下本町タマリウム
用途：防災建築街区の再生・活用提案
制作：2016年5月（原案作成：2015年6月）
提案設計：（2016年）菅沼昂志、川端一輝、高野哲也、今江将吾、河合栄拓、鈴木友之、保浦開、飯田耕平、小島実希、牧智也、（2015年）菅沼昂志、市村千尋、大野将弥、川端一輝、長屋美咲、水野由女、今江将吾、河合栄拓、児玉春香、鈴木友之、保浦開
指導・協力：柳沢究、丹羽哲矢（club lab.）
受賞：「第13回集合住宅再生・団地再生・地域再生学生設計賞」入賞

沿いに植栽付きのベンチなどを設置し、小さな「たまり」をつくっていく予定だ。「最終的に提案しているものの雰囲気が一部味わえるような場所をつくっていきたい」と柳沢先生は話す。

水辺空間の倉庫を遺産に認定

有松と犬山は地域からの相談や共同研究の依頼を受けるかたちでプロジェクトが始まったが、研究室が独自に着目して調査を進めているのが中川運河プロジェクトだ。中川運河は名古屋駅南部に位置する旧国鉄笹島駅（現JRあおなみ線ささしまライブ駅）と名古屋港を結ぶために開削された全長約8㎞の運河である。戦後から昭和40年頃までは水運に活用されたが、現在では運河を走る船もほとんどない。最大約90m幅の運河の両岸は市有地で、港湾関係業の倉庫や工場が建ち並び、生い茂る木々や空地などによって名古屋の都心にあるとは思えない静かな水辺空間を形成している。名古屋市としてもこの遊休地をにぎわいにつなげるための取り組みを始めているが、そうした動きに対し、「安易に再開発するのではなく、奇跡的に生まれた現在の不思議な雰囲気を活かしながら、うまく中川運河の魅力を残して再生するべきだ」と柳沢先生は警鐘を鳴らす。

この中川運河の魅力的な水辺空間の今後のあり方を検討する基礎データとするため、2014年度から2015年度にかけて、中川運河の上流部の沿岸倉庫群の調査を行った。中川運河の産業遺産倉庫の活用を見据え、特に中川運河の魅力的な景観や空間の創出に寄与していると思われる倉庫を選定し、独自に「中川運河遺産」として認定。『中川運河倉庫カタログ2016』として冊子にまとめた。現在は、関係者にプレゼンを行い、遺産に認定した倉庫を生かすための提案をしている段階だ。「将来的には、倉庫を使って、実験的にリノベーションするような展開になったら面白い」と柳沢先生は話す。

さらに、柳沢先生が名古屋市の景観アドバイザーを務めているため、中川運河に架かる橋の架け替えにあわせて、新しいイメージの欄干デザインの提案なども行っている。現状はまだ基礎調査段階だが、今後は水際の緑を生かした活用や、他学科と共同して川の水質浄化とセットで提案するなど、再生のイメージがふくらむ一方だ。

今回、柳沢研究室がフィールドにしている有松・犬山・中川運河という3つのエリアへの取り組みに共通するのは、とにかくアクションをしかける姿勢である。どうなるか分からなくても、とりあえずやってみる。柳沢研究室のウェブサイト（http://q-labo.info/mejo/）にもそうした姿勢は表われている。サイトの内容がとても充実しており、ほぼすべての活動をリアルタイムで見ることができる。「載せられるものは全部載せる。社会に向けて発信し続ければ何かリアクションがもらえる」（柳沢先生）。その姿勢が人々を動かし、新たな展開を生み出すことにつながっている。

文・特記なき写真＝大家健史
＊印写真・資料提供＝名城大学柳沢究研究室

『中川運河倉庫カタログ2016』。
中川運河上流部沿岸の4地区に建つ全48倉庫を調査し、そのうち11の倉庫を中川運河遺産に認定。調査結果を分析し、各遺産のポイント解説などを行った

中川運河沿いに建つ倉庫の実測調査風景＊

●中川運河カタログ2016
期間：2014年10月〜2015年3月（C・D地区）、2015年9月〜2016年3月（A・B地区）
調査・カタログ制作：柳沢研究室中川運河チーム・（2014年度）大野将弥、高野哲也、水野由女、渡辺愛理、（2015年度）遠藤結夏、川嶌梓、児玉春香、高間智子
写真：横関浩（Stands Architects）
監修：柳沢究
協力：岡田一輝（柳沢研2015年卒業）、名古屋港管理組合、名古屋市臨海開発推進室、名古屋都市センター

架け替える橋の新しい欄干デザインの提案を説明する柳沢准教授と学生たち

研究室でのインタビューに応えてくれた柳沢先生（写真右）と研究室メンバー

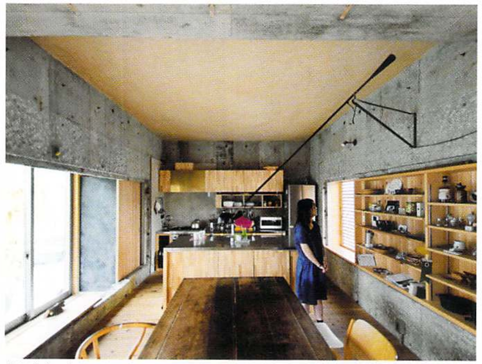
研究成果を実践通じて社会に還元

名城大学 理工学部 建築学科 准教授
柳沢 究（やなぎさわ・きわむ）

1975年 神奈川県横浜市に生まれる。1996年 中国からポルトガルまでユーラシア大陸横断の旅（〜1997年）、以降アジアを中心に都市・集落のフィールド研究に携わる。1999年 京都大学工学部建築学科卒業。2001年 京都大学大学院修士課程修了（布野修司研究室）。2001年 職人との協働による建築を目指し神楽岡工作公司・共同設立。2003年 神戸芸術工科大学大学院・助手（〜2008）。2008年 一級建築士事務所 究建築研究室・代表。2012年 名城大学理工学部建築学科・准教授。一級建築士 ／ 博士（工学）

研究室では主に地域性や生活文化との結びつき、時代・時間との関わりに注目しながら、具体的な都市／建築／空間の構成・形成プロセス・使われ方についての調査研究を行う。その成果を実践（設計提案・施工・ワークショップ）を通じて現代の社会に還元していくことを目指す。

基本方針は、①フィールドワーク、②体験／分析／表現のサイクル、③設計と研究を分けない。フィールド（現場）を通じた体験と実感を大切にして、それを客観化して分析し、第三者と共有できる形で表現する。デザインが好きな学生はデザインが生み出される原理や背景への関心を深め、研究が好きな学生は最終的に一つの形として提案することを大事にしている。フィールドワークを通して伝統的な都市空間や住居に学び、また設計活動を通じて、その土地ならではの建築の現代的なあり方を考えていきたい。



柳沢先生の自邸。築40年のRC造戸建住宅を改修した。教育の場として施工現場を開き、学生による土壁（天井）塗りなどのワークショップを行った